赤土疑惑 論点ずらす

昨日、菅官房長官会見での望月記者の質問をめぐる動き、東京新聞の見解を紹介した。官邸側が「事実に基づかない質問」として指摘した中に、沖縄・辺野古の海に投入されている土砂の赤土問題がある。

2月初め、ベルトコンベヤーで運搬船に積み込まれていく埋め立て用の土砂。その色は赤茶けていた＝沖縄県名護市の安和桟橋で（沖縄ドローンプロジェクト提供）

望月記者も担当した東京新聞 2 月 23 日朝刊「税を追う　辺野古埋め立て強行」を読むと、記者の質問が事実に基づくものであることは明らかだ。途中まで紹介しておきたい。

モニターに映る土砂は、確かに赤茶けていた。「埋め立てに使う岩ズリは本来もっと黒っぽい。明らかに違いますよ」。隣でドローンを操作していた土木技術者の奥間政則さん(53)はつぶやく。

2 月初め、沖縄県名護市の安和桟橋では、辺野古の埋め立て用土砂の積み出しが行われていた。ドローンの映像からは、ベルトコンベアーで運搬船に土砂が積み込まれていく様子がくっきりと見える。船内の土砂は、2 カ月前、辺野古の海に投入された土砂の色そのものだった。

大量の「赤土」が混じっている疑いがあるとして、県はこれまで再三にわたり、防衛省沖縄防衛局に立ち入り検査を求めてきた。赤土は粘土性で、水に溶けるとヘドロ状になり、サンゴなどの自然環境に悪影響を及ぼすからだ。

県によると、そもそも埋め立て土砂の検査は、防衛局が「まだ購入先が決まっていない」と言うので「購入時に確認する」という約束で、6 年前に埋め立てを承認した経緯があった。しかし、その約束は反故にされた。昨年 12 月 14 日朝、防衛局は県庁に、土砂投入を電話で通知してきた。県の担当者は電話口で防衛局職員に問いただした。「埋め立てに使う土砂の性状検査はしたのか」。検査結果がメールで届いたのは、その日の午後 5 時のことだった。

県の担当者はあぜんとした。1 年半〜2 年半も前の検査だったからだ。しかも届いた検査結果では、赤土を示す粘土分がほとんど計測されておらず、テレビに映っていた赤茶けた土砂とは似つかないものだった。

「投入した土砂と検査した土砂が違うのでは」。現場への立ち入り調査を求めた県に防衛局は「（立ち入りの）法的根拠を示せ」と居直った。年が明け、防衛局は「投入している土砂のデータ」を県に提出した。だが、検査は土砂の粒度と有害物質の有無を調べたもの。どのくらい赤土を含むのか、県は尋ねているのに、防衛局は赤土に一切触れず、「問題となるような汚濁はない」と切り返す。まるで「ご飯論法」だ。

（2019 年 3 月 13 日）